鈴木晋介『つながりのジャーティヤ—スリランカの民族とカースト』（京都：法藏館、2013 年、393 頁、本体 6,500 円＋税、ISBN978-4-8318-7438-2）

（評）高桑　史子*

スリランカ中央高地や周辺には、英国領時代に紅茶やゴムのプランテーション農園での労働に従事するために南インドから移り住んだ人々の子孫が暮らす。「インド・タミル」という公式名称で呼ばれる人々である。彼らは主に北部や東部に住む「スリランカ・タミル」とは異なる「民族」として括られてきた。歴史的に両者には接点がないにもかかわらず、1950 年代以降の「シンハラ対タミル」の政治的緊張の高まりの中で、シンハラ人からは「タミル」として一括りにされるようになった。この「インド・タミル」を筆者は「エステート・タミル」と呼び替えて、実際の生活の場でのアイデンティティの在り方を徹底的に日常にこだわりながら描き出している。祖父母世代よりも前の世代が住んでいた南インドは「見知らぬ過去」でしかなく、今やエステートという生活の場こそが彼 / 彼女らの生きる場である。著者はこのことにこだわり、「インド」ではない「エステート」で暮らすタミルの意味をこめて「エステート・タミル」の名称を用いて論を進める。

著者が出会ったエステート・タミルの人たちはシンハラ人の村に囲まれた小さなゴム園に暮らす。水田とその周囲に広がるゴム園という、典型的なスリランカの農村が舞台であるが、水田の所有者がシンハラ人で、ゴム園で働くエステート・タミルの人は農地を所有しない。そこで日常的にシンハラ人との様々な関係性を確認しながら生きていく彼 / 彼女らは、関係論的に「わたしたち」を想像 / 創造し続けているという。つながりの中に己を定め直していく営みを記述した民族誌である本書のタイトルに「つながりの」という形容詞を付与した著者の意図がこめられている。そして彼らの「ジャーティヤ」の在り方にアイデンティティ構築の方法を読み取ろうとする。ジャーティヤとは、カースト、民族、種類などと翻訳されるが、ここでは彼 / 彼女たちによって独自のジャーティヤがつくられている。周囲のシンハラ人と多様な関係を確立し、スリランカ・タミル社会に存在するブラーマンを頂点とする位階制を欠いた調査地の人たちが、いかにして「わたしたち」というひとつのジャーティヤ、つまり「人の種類」をこしらえているのかが明らかにされる。状況に応じながら関係論的に「人の種類」を創成し、その過程で自らのアイデンティティを構築していく、マイノリティであるエステート住民の生きる姿を具体的かつ詳細に描写した民族誌である。

*　首都大学東京人文科学研究科教授（社会人類学）

・　2008、『スリランカ海村の民族誌—開発・内戦・津波と人々の生活』明石書店。

・　2014、「スリランカにおける二つのカタストロフィと向き合う—内戦と津波の経験から」、『カタストロフィと人文学』西山雄二編、勁草書房、167–191 頁。

随所に著者と調査地の人たちとのやり取りが再現され、何気ない人々の行動や言説の中にアイデンティティ形成にかかわる意味を指摘しながら読者をエステート・タミルの生活に誘う本書は以下のように構成されている。

序章。第一章　エステート・タミルという人々。第二章　調査地の概要―シンハラ村に囲まれたゴム園。第三章　調査地の経済状況および経済関係。第四章　エステート・タミル・カースト１―括りの相。第五章　エステート・タミル・カースト2―つながりの相。第六章　エステート・タミル・カースト3―境遇と長屋の共同性。第七章　シンハラ・カースト―村落生活における括りとつながり。第八章　民族対立状況下の二つのジャーティヤ。第九章　つながりのアイデンティティと女神儀礼。終章。引用・参考文献、あとがき、索引。

以下、ごく簡単に紹介しよう。序章では、本書で論じられる「人の種類」としてのジャーティヤを理解する研究のツールとして、修辞学の「堤喩」、「隠喩」、「換喩」の術語が整理され、また、分析に用いる語として〈括り〉・〈まとまり〉・〈つながり〉の語の説明がある。頻繁に登場する「（カースト／民族／宗教／序列などに）違いなどあるものか／違いなどない」という言説、そしてそれを証明する彼らのレトリックを読み解くために、このいささか難解な用語説明に費やされる数頁を丹念に読むことが、多民族・多文化社会スリランカで生きるマイノリティの人たちの自己認識のあり方、さらに当事者にとっての「民族」や「カースト」というものの実態解明の糸口となる。第一章はエステート・タミルの歴史的・政治的背景が述べられ、第二章と第三章は調査地である村（ゴム園）と周辺のシンハラ人の村（水田）の概況が述べられる。調査地で営まれる様々なジャーティヤの人たちの日常が丹念に描かれる。ゴム園での労働では十分な賃金を得ることが困難なエステートの人たちは、余暇時間にシンハラ人の水田で雇用され家計を補う。このような経済関係と、地縁的にも身近な隣人であるという関係が以前から存在していることなどの記述により、第四章以降のジャーティヤ論に進むための準備が整えられる。第四章から第六章までは、「ひとつのジャーティヤ」であるエステート・タミルの抽象的な〈括り〉、対内的・対外的な〈つながり〉、さらに彼／彼女らのある意味、均質で平等な〈まとまり〉をイメージさせる長屋の生活が論じられる。第七章は隣人であり、親密であるとともに、時には疎遠でもあるシンハラの生活が描写される。第八章は、両民族つまり２つのジャーティヤの差異化とつながりを論じる。本来ならばエステート・タミルには無関係なはずの対立（スリランカ・タミルと多数派シンハラによる政府との対立）というマクロな政治状況下で、この村の人たちも翻弄されるのであるが、対シンハラとの関係性の中で「対他」的つながりを組成に構成されるひとまとまり（ひとつのジャーティヤ）である「わたしたち」が明らかにされる。最後の第九章は、海を渡ってスリランカにやってきたと伝承される女神祭祀の詳細な報告と、女神とのつながりの中にある新たなアイデンティティの創成を明示する。

短い終章はマクロのレベルでの両民族の緊張という政治状況に再度立ち戻りながら、人々が暮ら

しの中で紡いできた「ひとの種類」は、アイデンティティ・ポリティクスのシナリオが根底に有するような類―種の堤喩的論理ではなく、種々の具体的つながりによって構成される換喩・隠喩的まとまりとして姿を見せるものであるとする。絶えず「ひとの種類」をつくりながら生き続ける人々は、つながりによってその在りようを変える潜在性も有するのだという。

村人は著者に対し、一貫してカースト、民族、序列、つまりジャーティヤに「違いなどない」を強調し、「違いがない」ことを様々なレトリックを駆使して強調する。彼らの論理の組み立てはスリランカで生まれたのでスリランカ・タミルであり、宗教は仏教徒であり、そしてそのあとに「仏教もヒンドゥー教も違いはない」というレトリックが続く（彼らはヒンドゥーの女神を信仰している）。そこでこだわるべきが「違うこと」つまり差異化の意味であり、著者はそれを「排他的差異化」と「対他的差異化」で示す。前者は「括り」つまり提喩的論理、後者は「つながり」つまり換喩・隠喩的論理に連なる。たしかに対内的領域においては、エステートのゴム園で働き、時にシンハラ人の村で賃金労働に従事するという均質な日常生活の中で、序列が極端なまでに曖昧化している。さらにいえば、差異化そのものが強い関心事ではない。「序列などに意味がない」のである。しかし、そのような曖昧で彼らが意味のないと断言するものが、対ブラーマン、対シンハラとなるとそこに序列を意識するのである。彼らの生活圏にブラーマンはいないので、ここで登場するブラーマンは「ジャフナやインドにいる」人たちで、この事実を認識した時点で差異や序列を認めることになる。「わたしたちもシンハラも変わりない」のだが、「高いシンハラ / 低いエステート・タミル」でもある。しかし、それは低賃金労働者で土地をもたないエステート・タミルが隣人のシンハラ人の村からジャックフルーツをもらう、賃金不足を補うために賃労働に従事するなど、「依存する－依存を受け入れる」などのような隣接性から生じる換喩的つながりで結びつく関係に基づくものである。

「違いなどない」は、隣人であるシンハラ人の言説にも登場する。シンハラ人にとってもシンハラとエステート・タミルには違いはないのだ。しかし、違いはある。両者を差異化しているのが通婚規制である。しかし、それはシンハラ対タミルという対立にあるのではなく、カーストや親族組織と複雑に絡みあったものである。シンハラにもタミルにも、ともに結婚が可能な関係 / 不可能な関係という親族カテゴリーがある。南インドやスリランカに共通する類別的交叉イコト婚を優先する両社会では、シンハラ人にとってエステート・タミルの人が結婚相手にならないのは、彼 / 彼女がタミルだからではなく、親族カテゴリーの括りの外部者であるからだ。つまり、ふさわしい結婚相手（それは交叉イコトのカテゴリーに括られる人たち）以外は、すべて「それ以外」なのである。その中には異カーストの人も含まれる。類別的交叉イトコを望ましい結婚相手としてきた当該社会では、異カーストもタミルもすべて差異化の対象となる人たちである。しかし、ある世代で異カーストや異民族間で結婚が成立すると、異なるジャーティヤ間に類別的交叉イトコのカテゴリーに括られる人が出現し、この規制は変化するであろうし、事実、配偶者が村外出身であるシンハラとタ

ミルの夫婦もいるのである。

本書から現代スリランカのジャーティヤに、質的に異なる２つの相をみてとることができる。ひとつは提喩的な括りの相、もうひとつは換喩・隠喩的なつながりの相とでもいうべきものであり、彼らは括りと化したカーストを放棄し、つながりをつたってエステート・タミルというひとつの巨大なカーストを生きようとしている。均質性やある種の平等主義的な個人の集まりがカーストを廃棄させているのではなく、括りと化したカーストが人々が生きる形に成型し直されようとしているというのである。

最後に、本書は久々に出現した秀逸な村落研究でもあることも特筆したい。1960 年代から 70 年代にかけて一世を風靡した村落研究は、親族研究の衰退やとくにスリランカの場合は村落における政治力学や村落を舞台とする暴力（Political Violence）に関心が移行していた。本書はジャーティヤについて論じつつ、現代スリランカ農村を舞台とする新たな村落研究書としても大いに研究者を刺激するものである。